

環境について
みなさんもう一度真剣に考えてみませんか？

Save The Kikuchi River

地球温暖化について

戦

後しばらくはこの川にも、
いろんな種類の魚が沢山
いました。現在はあまり
見なくなりました。

見なくなりました。シマドジョウもその一つです。十町川ではカワドジョウと言っておりましたが、私が子供の頃近くの小川の流れの緩やかな浅瀬の砂地に行くと、何かキラキラとしてその後を見ると何も見えないという不思議な生物がいるなと思ったのですが、何のことはないシマドジョウでした。コントラストの強い縞模様の非常に美しい魚です。この辺りではあまりたくさん取れないためか、食用にもせず、雑魚として無視されてきた小魚ですが、以前は観賞用としてアメリカへ輸出していた時もあるようです。

コイ目ドジョウ科シマドジョウ属、九州全域と山口県、広島県、伊豆半島、紀伊半島など本州中部、四国西南部など広く分布していますが、地域によって縞模様に微妙な違いがあるので、熊本のは特にヤマトシマドジョウと呼んでいます。普通のドジョウは口ひげが10本ありますが、これは4本少なくて6本しかありません。日本には近縁種として、スジシマドジョウ、アジメドジョウがあります。ヤマトドジョウは体側の中央に8〜10個の黒点が並び淡い細線がこれを貫いています。背ビレ、尾ビレにも黒色斑紋があり横に何列か

並んでいます。体は円筒形で細長く鱗はありません。

スナドジョウ、トゲドジョウ、スナムグリ、ムギナ岐草魚、ササジヨウ(高知県など地方名があります。スナドジョウとかスナムグリなど言われるように水の澄んだ砂地に住み良く砂に潜ります。前に述べたように、キラキラと光ったらもうその後になにも居ない不思議な動物と思っていたのは、人が近づくとくねくねと体をくねらせて砂けむりを残し砂に潜ってしまうので姿を消してしまうということでした。

砂底を泳ぎながら砂ごと口の中へ呑み込んで砂に含まれている有機物を濾して食べ。口の中に入れた砂はエラから排出します。排出される砂はきれいな砂になっているので、淡水魚を飼育されている人にとっては掃除屋さんとして重宝がられます。

ドジョウにしては珍しく棘をもっていて、うっかり握るとチカッとやられます。棘は眼下棘といって、眼の下にある骨を後ろに向かって突き立てることができるようで、護身用か縄張り争い用と思われます。投げ網には普通ドジョウは入り難いのですが、シマドジョウは時々掛かってくる場合があります。この眼下棘が細い糸に架かってくるのです。護身用の武器が逆に災いして働くこともあるものです。



カワドジョウ

目立たない小魚ですが川魚では一番美しい魚の一つではないでしょうか。コントラストの強い縞模様が、くねくねと水底を泳ぎ回り、水槽で飼っていると、砂に潜ったり水槽の隅を下に行動したりするそうです。この上下運動は気圧の変化と関係があるという研究結果がでています。そのため英語でウエザー(気象)フィッシュという名前も持っています。淡水魚の水族館では殆どの水槽に掃除屋さんとしての魚を入れてあるところがあるそうです。奈良県では絶滅危惧種に指定されています。

歴史調査の楽しみ方

日平城跡

現在、西側主軸尾根を調査しています。この尾根は、城跡中心部のⅢ郭から、日平集落側へ延びて行きます。Ⅲ郭から図中①の間は、長さ300m、高低差29.3mに留まりますが、途中でアップダウンを繰り返して、小山AとCが連続します。この時、山道は、これら小山の北下を通り、小山Dで南下に変わります。山道の下りは緩やかです。

地形が一変するのは、①から先です。傾斜角度が急に大きくなって、尾根幅も広くなります。①と②の間は、長さ100mで、高低差が36mに変わります。尾根幅は、最大15.5mで、スキー・ジャンプ台の助走路みたいです。上面域は造成されて、段差の低い小段が7段も連なります。傾斜地ですから、守備兵の足場を確保するための造成地と思われます。小屋掛け程度の建物もあったかもしれませんが。山道は、尾根筋の中央を通ります。

1m未満の山道が、大いに注目されます。南面は、大岩の並びが、あたかも石垣のようになっており、北側は、切り立った山腹になっています。したがって、山道は地形の大きな制約の中を通ることになります。(イ)は、城門の設置場所として、最適な箇所と言えます。

尾根は、小山Fの西下からガクンと落ちて、再び、痩せ馬地形に戻ります。ここまで調査を終えましたが、この先の尾根にも、興味深い遺構がありますので、概略を説明して、来月号につなぎます。

痩せ馬地形の始まりに、これまた、小山Gの岩山があります。(ロ)は、小山FとGに挟まれた窪地で、山道が膨らむ箇所になります。どこから見ても、「武者溜り」です。

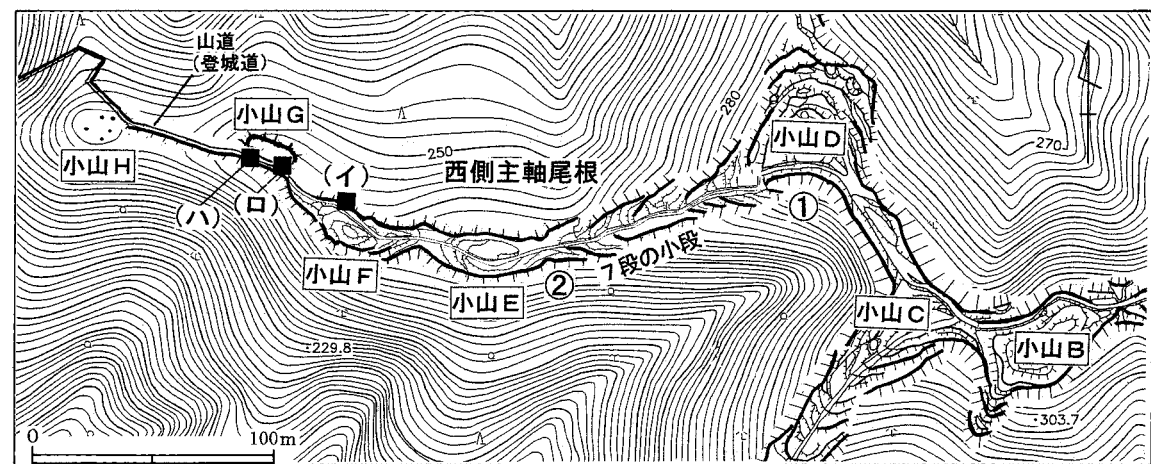
次に(ハ)です。小山Gの南下を通る山道箇所、地形的には(イ)と全く同じです。山道の北面は、小山Fの大岩が壁を形成して(ただし、岩は動いて、山道側に傾いています)、急な南側斜面には、3つの岩石が、上下3段に張り付いています。上段の岩は、山道の南縁に食い込んでいます。

ここも極端に山道が狭くなります(現在は幅70cm)。山道端の岩は、門礎石に見えます。有力な第2の城門箇所です。

小山Hは、Ⅲ郭から延びてきた西側主軸尾根の最終地点です。ここまでの測量杭を打ちました。②からの距離は200mで、Ⅲ郭から図面上での総延長は、600mにもなります。

小山Hは標高247mで、Ⅲ郭との高低差は79m。上面に平場があり、しっかりとした造成がなされています。南側にある若干の高まり部分は、土塁が積み重ねられていた可能性があります。北側の斜面部には、小段も付いています。山道は、小山Hの北下を通っていますが、すぐに大きく傾斜して、山腹を下り始めます。日平城跡の西端縄張りです。

29日に、6月最後の調査をしました。午前中は下界と違い、とても涼しかったです。喜んでいたら、小山Hに測量杭打ちを始めると、ピタリと風が止み、サウナ状態になりました。日平城跡に、3回目の夏が来ました。



日平城跡 西側主軸尾根

大田 幸博

(元・菊水町史編集委員会副委員長)